博士学位論文審査要旨

２０１２年7月１４日

論 文 題 目：　死の運命とヘルダーリンの美的存在論
学位申請者：　宇野　大輔
審 査 委 員：主　査：　文学研究科　教授　　田端　信廣
　　副　査：　文学研究科　教授　　長澤　邦彦
　　副　査：　文学部　　准教授　　中川　明才

要　　旨：

本論文は、思想史上特異な位置を占めている F. ヘルダーリンの「美的－存在論的思索」についての独創的研究である。著者は、ヘルダーリンの「哲学的」思索を初期ドイツ観念論の展開過程のなかに位置づけ直そうとする近年の有力な解釈動向が、この「詩人」に独特の美的存在論の特色を看過していることを批判し、ヘルダーリンの思索を通常の哲学的概念装置で解釈することを一貫して拒否している。そして、彼のイェーナ時代、ホンブルク時代の断章、書簡、草稿、詩を複合的テキストとして、「詩と哲学の一体性」を基軸としたヘルダーリンの「詩的かつ思想的造形」を多様な視点から特質づけようとしており、その企ては成功している。

本論文は、冒頭に「序章」を末尾に「終章」を配し、二章構成から成っているが、中間に詩作技法と美的世界観を関連づけるための「補論」を置いている。

序章は、当時の思想界で最も強い影響を及ぼしていたスピノザ主義とフィヒテの自我哲学との批判的対決を輪郭づけている。

第一章の前半は、イェーナ時代に成立したヘルダーリンのヘーゲル宛て書簡に記された「知識学」批判をテキストにして、この批判の背後にあるヘルダーリンの反独断論的な「存在」思想の特質を解明しようとしている。後半は、同じころ成立したと推定されている断章「判断、存在、可能性」をテキストにして、多数の先行研究を援用しながら、ヘルダーリンの「存在」が「自ら自身のうちに差異を有する一者」という内的構造を備えていること、彼がこの「存在」の統一性を「美」と結び付けていることが、説得的に主張される。

第二章は、ホンブルク時代の『エンペドクレスの基礎づけ』をメインテキストとしている。ここではイェーナ時代の「存在」が「純粋な生」ととらえ返され、この「生」のうちでの「人間」と「自然」との「調和的対立」関係が明らかにされている。この関係には、通常の関係理解を超えたような、両項の相互反転的移行の関係が認められることが指摘される。著者はこの特徴的な調和的対立の根源が「生」であるよりも、むしろ「死」であることを主張している。それゆえ「美」は「死」と不可分に結合されていることになる。

本論文の意義は、「詩」と「哲学」の間に身を置いたヘルダーリンの美的存在論を、多数の先行研究を活用して統一的に解釈することに成功している点にある。一部フィヒテ知識学の理解に行き届かない点も認められるが、この困難な課題に取り組んだことは評価に値する。

よって、本論文は、博士（哲学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

２０１２年7月１４日

論 文 題 目：　死の運命とヘルダーリンの美的存在論
学位申請者：　宇野　大輔
審 査 委 員：
　主　査：　文学研究科　教授　　田端　信廣
　副　査：　文学研究科　教授　　長澤　邦彦
　副　査：　文学部　　准教授　　中川　明才

要　　旨：

上記審査委員は、学位申請者宇野大輔氏に対する総合試験を 2012 年 7 月 14 日午後 3 時から、約 3 時間実施した。

総合試験において学位申請者は、提出された論文の内容に関する口頭試問に対して、適切に応答し、論文の意義とその研究水準の高さを示すとともに、主題の背景となる思想史的な理解についても広範な専門的知識を有していることを明らかにした。

また、語学試験（ドイツ語、英語）においても、学位申請者が研究上要求される外国語文献の読解能力を十分有していることが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目：　死の運命とヘルダーリンの美的存在論
氏　　名：　宇野　大輔

要　　旨：

当論文の目的は、詩人ヘルダーリンが求めた哲学とは何であるかを究明することにある。その際に重視するのは、理性の任意には従わない美や死というものの存在である。そうして得た結論とは、ヘルダーリンの求める哲学は無力な詩人に意義を認めるような哲学だということである。

当論文の考究は、ヘルダーリンのスピノザ批判を取り上げることから始まる。

ヘルダーリンにとって、すべてを説明しようとする体系のうちに神を位置付けることは、神を信仰の対象ではなくて理性の対象にすることに等しい。スピノザ哲学の無神論的性格はこの点に由来する。また一方で、唯一実体という神の位置付けから汎神論が帰結する。よって、スピノザ哲学の無神論的性格と汎神論的性格は不可分である。したがって、無神論を拒否するならば、すべてのものの実体として神を考えるという理論構築を否定せざるを得ない。言い換えれば、唯一実体としての神を拒否することは、スピノザ的汎神論の理論構築を拒否することを意味するわけである。それゆえ、無神論的スピノザ哲学を拒否するということは、同時に汎神論的スピノザ哲学を拒否するということにならざるを得ないと考えられる。

この見方を検討するために、『ヒュペーリオン』での自然描写を取り上げてヘルダーリンの描く自然がスピノザ的汎神論でないかどうかを検証する。そこで明らかになるのは、実際にヘルダーリンの自然観はスピノザ的汎神論ではないということである。その理由は、ヘルダーリンにとって神は、確かに自然のうちに見出されるにしても、それは自然と人間とを媒介する働きをするものとしてであって、スピノザが考えるように決して自然の実体としてではないと見られるからである。よって、神は自然を説明する原理として位置づけられるものではないと結論付けられるわけである。

とは言え、ここで二つの問題が考えられる。一つは、自然存在の原理が神でないとするなら、その原理はいったい何であるのか。もう一つは、自然と人間とを神が媒介するとはどういうことを意味するのか。当論文では、前者の問題を第1章で、後者の問題を第2章で扱うことにする。

ヘルダーリンにとって自然存在の原理の追求はフィヒテ批判と連動する。最初に、1795 年 1 月 26 日付ヘーゲル宛書簡におけるフィヒテ批判を取り上げる。そこでは、実在性と現存在という二つの存在概念の区別に注目しないとならない。ここで明らかになるのは、スピノザと同様にフィヒテも実在性を問題にしているのに対して、ヘルダーリンは現存在を問題にしているという違いである。この違いに基づくヘルダーリン思想の方向性は二つの面から理解される。一つは、自我を「わたし」という時間のなかに存在する個別的で有限的な存在者として理解するという点である。ヘルダーリンにとって「わたし」とは単に素朴経験的な概念を意味するものではなくて、現存在という存在論的観点を意味するものとして理解されないとならないものである。

二つめは、「存在そのもの」の自己差異構造とそれに基づく自己差異化についてである。この点を解明するためには、ヘーゲル宛書簡とほぼ同時期に成立したと見られる断片「存在、判断、可能性」を分析して、存在と存在者の区別、および、存在そのものと存在者の存在との区別という存在論的差異を指摘しないとならない。ここで言うところの区別とは、存在そのもののうちなる差異として考えらえるものである。何となれば、いかなるものも存在そのものの＜外＞に＜存在する＞ことはあり得ないからである。そのため、＜存在する＞ことの区別は、存在そのものとそれ以外の何かとの間に生じるものではなくて、存在そのものそれ自体のなかに生じるものでな

いとならない。よって、存在論的差異と言うべきその区別は存在そのもののうちにあることになる。したがって、存在そのものは、存在そのものそれ自身と存在者の存在との区別を自身自らのうちに有するような自己差異構造に基づくものであると考えないとならない。しかも、存在そのものはそうして存在者の存在をうちに含むことによって必然的に自身自らのうちに存在者を存在させていると見られる。よって、この点において、存在そのものの自己差異構造は存在そのものが自身自らを存在者として個別化する自己差異化の働きであると言うことができる。つまり、すべての存在者は存在そのものの個別化なのである。それゆえ、自身自らを個別化する働きとしての存在そのもののうちなる区別（自己差異）は、すべての存在者の根拠であると考えられるわけである。

こうして、あらゆる存在者は個別的に存在すると同時に存在そのもののうちに統一されていると言うことができる。すなわち、存在そのものとは、自身自らに差異を有する一者であるということである。このように、多様性と統一性が同時に成り立つことを多様の一致と呼ぶとき、ヘルダーリンは『ヒュペーリオン』でこの多様の一致を美の本質と規定する。ヘルダーリンの言う自然存在とはこのような多様の一致に基づく美として全体を形成するものであり、この美の原理こそ、自身自らに差異を有する一者であることを表す存在そのもののうちなる区別に他ならない。つまり、自然存在あるいは美の原理とは存在そのものを指すわけである。

ヘルダーリンは、このような存在そのものをフィヒテの絶対的自我に対して提起する。絶対的自我とはそれ自身のうちにはいかなる区別も持たない無差別的な統一である。これとは反対に、「わたし」という個別的存在あるいは現存在を問題にするヘルダーリンは、絶対的な統一にあってなお区別があることを求める。そのため、存在そのものは、単に自然存在の原理というにとどまらず、人間存在の原理としても考えられないとならない。そこでヘルダーリンは、自己意識の根底に存在そのものを位置づけて、「わたし」という個別的存在として自我を考えるべきだとするわけである。

また、存在そのもののうちに自然存在と人間存在が根拠付けられるということは、存在そのものにおける自然と人間との連関が考えられないとならない。この問題の追及は断片「エムペドクレスの基礎付け」（以下、「基礎付け」）に見ることができる。そこで、第２章でこの断片を取り上げることにする。

「基礎付け」によれば、自然と人間はそれぞれ非組織的なものと組織的なものという性格付けを与えられる。組織的なものとしての人間は非組織的な自然を形あるものへ、知や言葉へ形成する活動である。しかし、一方でその活動は、自然本来の非組織的なありようを切り捨てる面がある。そのため、人間はすべてのものを組織的なありようへと体系化しようとする。とは言え、これは組織的なものと非組織的なものとの二元的構造によって成り立つ生全体のありように反する。よって、人間は自然の非組織的なありようを取り戻す必要に迫られる。ここでヘルダーリンによれば、人間は自身自らの組織的なありようを放棄することで非組織的なありようを回復しないとならないとされる。

しかも、組織的なものが自分自身を失って非組織的になるほど、反対に非組織的なものは組織的に転じると考えられる。なぜなら、生全体はこの二つのものをエレメントとしているため、組織的なものが自らを非組織的にするというときには、生のうちなる組織的なエレメントを保持するために、もともと非組織的であるものが組織的なものに転化しないとならないとされるからである。よって、ここに人間と自然との入れ替わりが生じることになる。こうした転化の究極において人間と自然とのいわばシャーマニズム的な一体化が成り立つと見られ、それを具現したのが劇中の主人公エムペドクレスであるというわけである。

エムペドクレスの実現する一体化は多様の一致に基づくところの美的な統一に他ならない。しかし、ヘルダーリンによれば、その一体化の瞬間に「個人の死がある」（「基礎付け」）という。つまり、個別的な死とは全体的な生が実現するためのエレメントであると考えられるわけである。

とは言え、ヘルダーリンによれば、自然との一体化において実現される死は<神>によって与えられるという（何となれば、その死は自殺とはまったく意味が違うからである）。すなわち、自然と人間との一体化には神の媒介が必要だということであって、しかもここで自然と人間とを媒介するとは、人間に死を与えるということなのである。しかし、ヘルダーリンは現代を「乏しき時代」（「パンと葡萄酒」）と規定して、そうした神が人間のもとに存在せず、自然との一体化としての生全体をあらわすようなその死が与えられないと考える。そのため、現代では自然と人間との生における全体的統一は実現しないと言わざるを得ない。しかも、ヘルダーリンはその統一を決して人間の理性によって実現できるものと考えてはならないと見る。なぜなら、第一に、統一を性格付けているところの美は決して概念的に認識することのできないもので、理性の計画的な活動によって実現するような性質のものではないからであり、第二に、理性であらゆる問題が片付けられるとすることは、結局のところ人間に何が足りないのかについての認識を曇らせることになるからである。しかしそれにも拘らず、概して哲学は理性によってあらゆることを遂行しようとする。そこで、ヘルダーリンによれば、真に時代の乏しさから目をそらさないのは、哲学のように人間の行為を導かずに、ただ歌をうたうだけの詩人の使命であると考えられる。つまり、美と死という、人間理性によって任意に操ることのできないものに根付き、そうして何もしない無力さにおいて乏しさの認識を支えるような詩人の意義を認めることのできる哲学、ヘルダーリンの求める哲学とはそうしたものだというわけである。